根拠と結果を示す接続表現の日英比較：*After all* は「結局」か？

松岡和美／ノッター，デビッド

1．はじめに：*after all* と「結局」

完全な翻訳というのはほとんどの場合実現が難しいものである。特に，説明的な解説を加えるのではなく，ひとつの句を別の句で言い換えるような翻訳活動では，もとの表現に含まれるさまざまなニュアンスや含意が失われてしまうことは避けられないように思われる。しかしながら，その逸脱範囲については可能な限り制約をもうけておかないと，いわゆる「誤訳」があふれる原因ともなってしまう。この論考では，英語表現 *after all* の一種の定訳のように扱われている「結局」という表現について検討を加えた。

after all を「結局」と訳しても，スムーズな訳文ができあがることがほとんどである。たとえば下の例の *after all* は「結局」と訳することが可能である。（以下，例文中の下線はすべて著者による。）

(1)…realization that the stories one has worked so hard to tell are not <u>after all</u> self-explanatory. (Abrams 1982: xvi)
「他人に伝えるために大変な努力をして書かれたストーリーは / なのに，<u>結局は</u>わかりやすいものとはならなかった（という認識）」

(1) のような文例が存在するため，おそらくほとんどの場合に *after all* は「結局」と訳されてしまっていると思われる。

しかし，ある種の *after all* を「結局」と訳すことは，文の情報構造を組み替えるという意味で，重大な誤訳の原因となる。仮にそういうことが起こっても，実際には訳が間違っていることはまず表面化しないと思われる。通常の翻訳の場合は，訳を原文と照らし合わせて誤訳を発見するという仕事は存在しないからである。この論文では，そのような誤訳を引き起こしがちな要因として，*after all* の用法タイプが２種類存在することを論じ，それらと「結局」の用法との比較考察を試みる。

after all を含む文やそれに隣接する文の接続関係は以下の２つのタイプに分類される。

タイプ 1「結局」型
「結末がどうなるか予測がつかない」という前提が成り立つ状況において生じた結果を示している。

タイプ 2「根拠」型
典型的には隣接する二文で表現され，情報構造は
「結論　←　after all　根拠」となる。

次に続く２節・３節で，この２つのタイプについて詳しく述べることにする。最後に４節では，２種類の *after all* の違いが意識されなかったために生じた実際の誤訳に検討を加える。

２.「結局型」（タイプ１）の *after all*

ここで取り上げるタイプ１の *after all* は「結末がどうなるか予測がつかない状況で，（いろいろあった末の）結果」というニュアンスを示しており，日本語の「結局」と重なる用法であると考えられる。典型的な例は先に示した (1) や以下の (2) のようなものである。

(2) The Social Democrats say they are ready after all to begin talks on joining a coalition government. (Sinclair, et al. 2001)
「社会民主党は，結局は連合政府に加わる線で話し合いを始める用意があると語った。」

この「結局」の用法においては，根拠と結果との接続関係にもとづくニュアンスは影響しない。その事実を２種類の副詞節を用いて明らかにしたい。

日本語の「のに」「けれど」で導かれる副詞節は，(3) に見られるように一見交換可能のように見えるが，根拠と結果との接続関係によって (4) のように用法が異なる場合がある。（* は非文法性を表す）

(3) a. 用事がないのにでかけた。
　b. 用事がないけどでかけた。
(4) a. せっかく知らせてもらったのに，なぜ行かなかったの？
　b.* せっかく知らせてもらったけれど，なぜ行かなかったの？
（森田 1988）

森田 (1988) によると，「のに」を用いる場合は，知らせてもらったという状況設定があって，それを根拠として「だから当然～であるはずだ」という論理の流れを否定する場合に用いる。「けれども」にはこのような，理由や結果説明の論理的意識はない。

次に結局の用法を考えてみよう。下の例のとおり，「結局」は「のに」「けれど」の両方と共起が可能である。

(5) a. せっかく知らせてもらったのに，結局行かなかった。
　b. せっかく知らせてもらったけれど，結局行かなかった。

つまり，「結局」の用法には「このような原因があり」「結果としてこうなった」という論理の流れが情報構造として明確に示される必要はないということになる。これが (1) や (2) にあるようなタイプ１の *after all* と「結局」に共通する特徴である。

(6) His performance wasn't bad, after all.
「結局，彼の演技はそう悪くなかった。」（井上・赤野 2003)

(6) の文の前にどのような情報があったかは問題ではない。このタイプ１の *after all* は典型的には２つの文を接続するのではなく，状況を説明する文の中間的な位置，もしくは文末に生じることが多いように見受けられる [1]。

しかし，ここで論じたような「結局」の持つ意味と相容れない情報構造を含意するタイプの *after all* も存在する。それが，次の節で詳しく論じるタイプ２「根拠型」である。

３.「根拠型」の *after all*

以下の日英の文を比較すると，根拠と結果の情報を示す文の位置が逆転していることが観察される。「結局」は結果，*after all* は根拠を示す文に現れている。

(7) We decided not to buy a house. The economy, after all, hasn't recovered much.
「家を買うのをやめた。というのも，経済がちっともよくならないからだ。」

(7) にあるように，*after all* を含む２つ目の文は，その直前にある文の内容に関する「補足説明」の役割を果たしている。これを，タイプ１のように「結局」と訳してしまうと (8) のように, 結論の焦点が完全に入れ替わった「誤訳」

が生じる。

(8)（例 (7) の誤訳）:「家を買うのをやめた。結局，経済がちっともよくならない。」

次のような例も同じ情報構造を含んでいる。次に示す (9)(10) の両方の例において，*after all* を含む文は，その直前の文の内容を補足説明する役割を果たしている。

(9) It's not surprising you are sick. After all, you've drunk three bottles already.
「気持ち悪いのは当然だよ。だってもう３本も飲んだんだから。」
（国広他 1980）

(10) I thought you might know somebody. After all, you're the man with connections. (Sinclair et al. 2001)
「誰か知ってるんじゃないかと思ったんだ。だって君は顔が広いから。」

ここでとりあげたようなタイプ２の用法は, 学術書でも広く用いられている。

(11) Men had inordinate power within the Victorian family, but it was as husbands - not as fathers. The conservative conception of woman's role focused, after all, on the submissive wife rather than the submissive daughter. Nineteenth-century women, once married, did not retain crucial ties to their family of birth; marriage joined individuals and not their families.（Smith 1979: 231）
「ビクトリア朝の家族において，男は多大な権力をもっていたが，それは父としてではなく，夫としての権力であった。というのも，保守的な女性の社会的役割の概念は従順な娘ではなく，従順な妻に対するものだったからであ

る。19 世紀の女性は，一旦結婚すると婚家と重要なつながりを維持することはなかった。結婚は当事者を結びつけるだけであって，家同士を結びつけるものではなかったのである。」（訳は著者による）

ここでも，二つめの文は直前の文の補足説明である。このように，やや議論が分かれる意見（父としてより，夫としての男性が家族に権威をもっていたという解釈）に論拠を与えるために，*after all* という表現を使いながら，常識に近い情報を提示するというパターンである。つまり，やや説明が必要と思われる意見を述べたあと，「なぜそう考えられるか」という根拠をその次の文であげるために，*after all* が使われているのである。（この他に多数の例文を付記に添付したので参照されたい。）

これまで見てきたように，*after all* の用法には，「結局」という日本語表現とは相容れない使い方も存在している。*after all* の複数の用法を明確に区別せずに翻訳を行うと，英文である原著の筆者が意図しない「前提」や「結論」が日本語の翻訳に表れるという問題が生じてしまう。次の節では，実際に出版されているそのような誤訳の例をとりあげる。

４．根拠型の誤訳の問題：ケーススタディ

この節では，これまでの論考で取り上げた *after all* と「結局」間の誤訳は，情報構造の単なる誤訳以上の重大な問題を引き起こす場合があることを指摘する。次の例を参照されたい。

(12) The study of sex, Foucault remarks in an interview, is boring. After all, why spin out yet another discourse to add to the multiplicity which already exist? What is interesting is the emergence of an ‘apparatus of sexuality’, a ‘positive economy of the body and pleasure’. Foucault came to concentrate more and more upon this

‘apparatus’ in relation to the self. (Giddens 1992: 22)

下の例 (13) は (12) の「専門家による」翻訳である。

(13)「フーコーはあるインタヴューのなかで，性の研究は退屈である，と述べている。それにもかかわらず, フーコーはなぜわざわざ時間を割いてまで，すでにおこなわれてきた多彩な言説にまた新たな論考を付け加えようとしたのであるか？　フーコーの議論で興味深いのは,「セクシュアリティの装置」や「身体と快楽の積極的な産出配分構造」の出現である。フーコーは，自己との関連での「セクシュアリティの装置」に次第に関心を集中させていった。（ギデンズ 1995：39-40）

ここでは原文である (12) の *after all* はその翻訳である (13) においては「それにもかかわらず」と訳されてしまっている。実に不思議な訳し方である。(12) の *after all* はこの論文の分類における「タイプ２」つまり「根拠型」の典型例である。つまり，第２文の *why...* 以下は性の研究を退屈と考えるフーコー自身が提示した「根拠」である。

今まで論じてきたように,「根拠型」の *after all* はしばしば「結局」として訳されてしまうが，それはかならず誤訳となる。ここでの「根拠型」の *after all* の訳も誤訳であるが，それはいったいなぜ「それにもかかわらず」といった不思議な訳になったのだろうか。そして，ここでの *after all* はどういう風に訳すべきだろうか。これらの問題を検討するために，まずはこの段落を構成している文を順番に並べてみよう [2]。

(14)

(a)The study of sex, Foucault remarks in an interview, is boring.

(b) After all, why spin out yet another discourse to add to the multiplicity which

already exist?

(c) What is interesting is the emergence of an ‘apparatus of sexuality’, a ‘positive economy of the body and pleasure’.

(d) Foucault came to concentrate more and more upon this ‘apparatus’ in relation to the self.....

(15)

(a’) フーコーはあるインタヴューのなかで，性の研究は退屈である，と述べている。

(b’) それにもかかわらず，フーコーはなぜわざわざ時間を割いてまで，すでにおこなわれてきた多彩な言説にまた新たな論考を付け加えようとしたのであるか？

(c’) フーコーの議論で興味深いのは，「セクシュアリティの装置」や「身体と快楽の積極的な産出配分構造」の出現である。

(d’) フーコーは，自己との関連での「セクシュアリティの装置」に次第に関心を集中させてい」った。

ここで (a) は (a’) に対応しているが，ここでは特に問題はない。それから，(d) は (d’) と対応しているが，ここでも特に問題はないと言えよう。問題は，(b) と (c) に対する訳の (b’) と (c’) であり，この両方ともが誤訳である。そしてここで強調したいのは，(b) と (c) を正しく理解し，正しく訳すための最大のポイントは，「根拠型」の *after all* という接続詞の意味や機能を理解することである。換言すれば,「根拠型」の *after all* の機能を理解して初めて (b) と (c) の本当の意味の理解が可能となり，ここでの (b’) と (c’) という誤訳が生まれた原因は，訳者には「根拠型」の *after all* に対する理解がなかったからであるということは想像に難くない[3]。

(a) にはフーコーがインタヴューで，「性の研究は退屈である」と述べたと

いう情報がある。そして (b) は *After all* ではじまるので，ここにはフーコーが性の研究を退屈であると考えた根拠が述べられているという情報が読者に伝わっている（はずである）。つまり，ここでの *After all* だけで (b) はこの文の執筆者であるギデンズのフーコーに対する批判ではなくて，フーコー自身が提起している修辞疑問[4] だということがわかる。つまり，(b) と (c) では，ギデンズが自分の意見を述べているのではなくて，むしろフーコーがインタヴューで言ったことの内容を要約しているということが，*After all* の使用から明らかになっている。(c) ではフーコーの言ったことの内容の要約を続けながらフーコーが実際にインタヴューで使った表現をもそのまま使っている。(d) では「フーコー」が主語となっているので，この時点からはギデンズがフーコーの言い分を要約しているのではなくて，自分の観点からフーコーについて書いていることが明白である。(a) から (d) までを自由に訳せば，次のようになるだろう[5]。

(17) フーコーはあるインタヴューのなかで，性の研究は退屈である，と述べている。すでに（性に関する）多くの言説が存在しているのに，新たな言説を付け加えることには意味がないじゃないか，と。むしろ，面白いのは，「セクシュアリティの装置」や「身体と快楽の積極的な産出配分構造」の出現である，と。フーコーは，自己との関連での「セクシュアリティの装置」に次第に関心を集中させていった ……

ここで注意すべきことは,「意味がないじゃないか, と」と「出現である, と」の「と」である。この部分を英語で表現する場合，普通は “he/she said that...” などが使われるが, ギデンズの文章で “he said that” や “Foucault said that” が必要でないのは，*After all* が用いられているからである。それから，*After all* に値するような接続詞は (17) では使われていないが，それは根拠型の *after all* にぴったりと対応する日本語の表現は存在しないからである。（言うまで

もないことだろうが，日本語と英語は一対一に対応している言語ではないので，こういった場合は無理に直訳しようとすれば誤解を招くだけである。）重要なのはここで根拠型としての *after all* がどういった機能を果たしているのかを把握することである。それがわかれば (b) と (c) ではギデンズが自分の意見を述べているのではなくフーコーの言い分を要約しているということが明らかになるので，「と」をセンテンスの最後につけるなど，自然な日本語を用いてこの 2 文がフーコーの言い分の要約であるということを表現できる。

5．結論

この論文では, *after all* の訳が必ずしも「結局」とはならないことを論じた。日本語の「結局」の解釈では，「けれども」で導かれる副詞節と同様に，根拠との関係は特に明確でなくてもよい。「結局」のもつ意味「さまざまな曲折をへて，最後におちついたところ（大辞林　第二版）」は根拠にもとづいた論理の流れを必ずしも前提としない。

しかし, 英語の *after all* の用法には「結局型」（タイプ１）と「根拠型」（タイプ２）の２つがあり, そのうち後者は「結局」とは相容れないものである。「結局型」（タイプ１）の *after all* は直接的に根拠との関係を含意せずに結果を表現できるもので，文中･文尾に現れることが多いようである [6]。「根拠型」の *after all* は「その結論に至った根拠の説明」で，2 番目の文（特に文頭が多い）に現れる。この用法は状況を「根拠」とした論理の流れにもとづいている。このタイプは常に結果の補足情報を与えるものであることから，「根拠と結果の関係に敏感」である。このタイプの試訳としては「なぜならば」「というのも～からである」「つまり」などを提案したい。

換言すれば，*after all* と「結局」の用法の共通点は非常に部分的であるということである。「結局」と同じ含意を持つのは最初のタイプ（結局型）の *after all* だけとなる。このタイプの存在によって，「after all = 結局」という

一種の誤訳が定着したと考えられる。ここで述べてきた誤訳が根拠と結論との関係を逆転させる効果を持つという点を考えると，日本語を母語とする英語学習者，また英語を母語とする日本語学習者に対して *after all* が含意する２種類の接続関係を指摘しておくことは非常に重要であると思われる[7]。

謝辞

この論文の執筆にあたって，杉岡洋子氏，鈴木亮子氏から貴重な助言をいただいた。すべての文責は筆者にある。

注

1 ただし，*after all* を含む文の中には必ずしも結果を含意しないものも存在する。次の例を見てみよう。

(a) I came out here on the chance of finding you at home after all…(Sinclair et al 2001)

この状況では，話者は聞き手である *you* が家にいるのかいないのか，予測がつかないままに家を訪ねたというニュアンスが感じられるが，結末はどうであったのかはこの文だけでは明確ではない。相手に話しているということは，結局聞き手は家にいたという解釈がなりたつように思われるが，以下の例から，それは *after all* の用法からもたらされる含意ではないことがわかる。

(b) I came out here on the chance of finding her at home after all, but she was not here.

よって，結末を含意しない (a) のような文を「結局」を使って翻訳することは不可能であると思われる。ここではこのような例は「結局型」の特殊例としてとらえることにする。

2 (b) を (b’) と比べてみると，*after all* の訳し方の問題以外に，*spin out* の意味として「時間を割いてまで」が適切かどうかや *multiplicity* の意味として「多彩な」

が適切かどうかなどの細かい点もあるが，ここではそれらにこだわらずに，明らかに誤訳になっている箇所だけに注目していきたい。

3 (13) には，*after all* の訳し方の他にも，重要な誤りがある。それは，*why spin out yet another discourse...* に対する「フーコーはなぜ……また新たな論考を付け加えようとしたのであるか」という訳である。比較すれば，二つの相違点がある。第一に，日本語には「フーコー」があるのに英語にはない。ここから，原文では主語が省略されていると訳者が考えたであろうことが推測される。翻訳をわかりやくするために日本語訳に主語を加えたということである。

しかし，日本語と違って英語では主語が略されることは普通あり得ない。英語の単純な疑問形の場合，“Why” の後は “do you” や “is he” などがくるものである。例えば，「どうして店へ行ったのですか」というならば，“Why go to the store?” とは決して言わない。“Why did you go to the store?” というのである。さらに，(b’) の日本語文は過去形になっているが，(b) の英語はそうではない。もし「フーコーはなぜ …… また新たな論考を付け加えようとしたのであるか」と言うならば “why spin out yet another discourse...” ではなくて，“Why did he （あるいは did Foucault) spin out yet another discourse” となる。つまり，(b) での “why spin out yet another discourse...” は “Why go to the store?” のように, 単純な疑問形ではない。それはいわゆる修辞疑問 (rhetorical question) と呼ばれる特殊な用法である（修辞疑問の例については，以下の注４を参照）。

この場合は，その修辞疑問を提起しているのはいったい誰であるかという問題が残っている。当該分野の専門家であれば，ギデンズがフーコーのセクシュアリティに関する仮説に対しては批判的だという知識があるので，この修辞疑問をギデンズがフーコーに対する批判として提起しているものだと解釈することは考えられる。しかも，フーコーが実際にセクシュアリティの歴史について多く論考を行ったという専門知識を持つ社会学者なら，この訳者のように「新たな論考を付け加えようとした」と過去形にすることは一種自然であるように思われる。また，インタヴューでフーコーが，性の研究は退屈であると述べているので「それにもかかわらず」という接続詞が適当に感じられるということもあるかもしれない。しかし，訳者の専門知識は重要でありながらも，翻訳作業がそれに過剰に影響されることは望ましくない。この場合，英語をみれば修辞疑問を提起しているのはギデンズではなくてフーコーであることは明らかで

ある。その鍵が「根拠型」の *after all* の正しい理解にある。

4 修辞疑問の事例としては，次のような会話が考えられる。

(16)
A: I'm thirsty. I think I'll go out to the store to buy some milk.
B: Why go all the way to the store when there is plenty of milk in the fridge?

ここでは B はまじめに「冷蔵庫に牛乳がたくさんあるにもかかわらず，なぜわざわざ店まで買いにいくのですか」と聞いているわけではない。そういう質問の立て方も可能だが，そういった単純な疑問形の場合は，*Why go all the way to the store...* ではなく主語を表現して，"Why are you going to go all the way to the store..." というはずである。ここでの B の台詞はそういった単純な質問ではなくて，修辞疑問である。つまり，単純に理由を尋ねているのではなくて，自分の意見を述べているわけである。すなわち，「冷蔵庫には牛乳がたくさんあるから，何もわざわざ店まで行く必要はないじゃないですか」ということになる。本文 (b) での *why spin out yet another discourse...* もこの種の修辞疑問であると理解することは誤訳を避けるための条件であると言えよう。

5 (c) での *positive economy of the body and pleasure* というフーコーの表現をどう訳すべきかという厄介な問題もあるが，とりあえずここでもとの訳者の訳をそのまま用いることにする。

6「結局型」の例に共通してみられるもうひとつの特徴は，*after all* は動詞句を修飾する副詞であるという性質である。この動詞句修飾という性質がこのタイプの含意と関係している可能性もあるが，具体的にどのようなメカニズムでその含意が生まれるのかは今後の研究課題としたい。

7 また，ここで考察したような日英の類似表現における情報構造の違いを意識化することは，それぞれの母語話者の認知における情報処理方法の相違点を考えるうえでも有用かもしれない。

引用文献

Abrams, P. 1982. *Historical Sociology*. Cornell University Press.

Berman, M. 1989. *Coming to Our Senses: Body and Spirit in the Hidden History of the West*. Simon and Schuster.

Brinton, M. C. 1993. *Women and the Economic Miracle: Gender and Work in Postwar Japan*. University of California Press.

Clarke, A. & J. Clarke. 1982. "Highlights and Action Replays - Ideology, sport and the Media." In J. Hargreaves. *Sport, Culture and Ideology*. Routlege and Kegan Paul.

Giddens, A. 1991. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Polity Press.

Giddens, A., 1992. *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Stanford University Press.(アンソニー・ギデンズ「親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ，愛情，エロティシズム」松尾精文・松川昭子訳 1995 而立書房）

Hansen, D. "The Child in Family and School: Agency and the Workings of Time." In D. Field, D. Hansen, A. Skolnick and G. Swanson eds., *Family, Self, and Society: Toward a New Agenda for Family Research*. Lawrence Erlbaum Associates.

国廣哲彌・安井稔・堀内克明（編）(1980)「プログレッシブ英和中辞典（第３版）」東京：小学館。

井上　永幸・赤野　一郎（編）(2003)「ウィズダム英和辞典」東京：三省堂。

森田良行 (1988) 「日本語の類意表現」東京：創拓社。

Seidman, S. 1991. *Romantic Longings: Love in America, 1830-1980*. Routledge.

Sinclair, J. et al. (eds.) *Collins Cobuild English Dictionary for Advanced Learners: Third Edition*. 2001. Glasgow, UK: HarperCollins Publishers.

Smith, D. S. 1979. "Family Limitation, Sexual Control, and Domestic Feminism in Victorian America." In N. F. Cott, and E. H. Pleck eds., *A Heritage of Her Own: Toward a New Social History of American Women*. Simon and Schuster.

付記：タイプ２「根拠型」after all の例文

(a) It may at first seem strange that I turn to Parsons for this example - rather than those of a contemporary researcher/theorist who has focused more persistently on family-school research. Who, after all, reads Parson these days? But, like Freud, Parsons profoundly affected the cultural understandings we bring to our work,… (Hansen 1993: 75)

(b) Gilligan offers a critique of Kohlberg that is quite incisive, and that I think definitely holds up; but it is precisely this critique that confirms the Kohlberg schema as Radding has applied it to medieval culture. This was, after all, a male culture; institutions such as the monastery and the law court had little to offer women, and the *chanson de geste* was a celebration of male military exploits. (Berman 1989: 217)

(c) On the one hand, the changes in the age structure of manufacturing and clerical employment for Japanese women might be seen as welcome shifts. After all, this means that younger women are going into white-collar employment at a greater rate than before, which should translate into higher prestige and earnings. (Brinton 1993: 36)

(d) ...a revival of religious or, more broadly, spiritual concerns seems fairly widespread in modern societies. Why should this be? After all, each of the major founders of modern social theory, Marx, Durkheim, and Max Weber, believed that religion would progressively disappear with the expansion of modern institutions. (Giddens 1991: 207)

(e) We should take pride, not just in success - because success at all costs for its own sake, is no real source of satisfaction, but also in having competed, having tried our best. It is this virtue which demonstrates those English characteristics of maturity, self-discipline, moderation. There is, after all, ‘more to life than winning’. (Clarke 1982: 83)

(f) Many white middle-class men of this period sought in women not only the qualities of their mother but a love that was maternal-like. Maternal love was, after all, typically their primary love experience. These men married, in part, to be loved as they were by their mothers. (Seidman 1991: 107)

Synopsis

Cross-linguistic Analysis of Connectives of Reasons and Results : Should *After All* Be Translated as '*Kekkyoku*' ?

Kazumi Matsuoka
David Notter

The Japanese term *kekkyoku* is commonly used to translate the English expression "after all." While this can result in an accurate translation in some instances, in many cases using *kekkyoku* to translate "after all" results in an erroneous translation. In this paper we argue that the tendency to erroneously render "after all" as *kekkyoku* stems from a lack of general awareness that in addition to the usage of "after all" which is essentially synonymous with *kekkyoku* (meaning roughly, "in the end"), there is a separate usage which functions in an entirely different manner and has a completely separate meaning. We refer to the former usage as the "*kekkyoku* (consequence) type" and the latter usage as the "*konkyo* (reason) type." When the "*konkyo* type" of "after all" is found in a sentence, it functions to let the reader know that supplementary information is being provided which will clarify the rationale behind an assertion which has been made in the preceding sentence (e.g. "It's not surprising you are sick. After all, you've drunk three bottles already.") In this case, as in many others, if *kekkyoku* is automatically implemented to translate "after all," a relatively smooth-sounding translation will be the result. However, it will be a mistaken translation. As a case study, we examine one instance in which the "*konkyo* type" of "after all" was mistranslated in a

published translation of a book by a sociologist. We point out if translators gain an understanding of the nature of the "*konkyo* type" usage of "after all," this kind of mistranslation can be avoided.